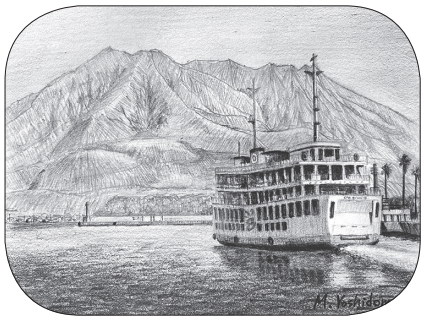
令和６年８月22日発行
通巻　第 549 号 8月号



令和６年度

鹿児島の教育

８月号

巻頭言

新学習指導要領と大学入試共通テスト

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副部会長
県立鹿児島中央高等学校長
野村　義文

皆さんもご存じのとおり、高校では令和四年度から年次進行で実施されていた新学習指導要領が今年度で一～三学年での実施となり、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校など多くの学校で新学習指導要領に基づく指導が行われることとなります。そして、令和七年度大学入試などの試験は、新学習指導要領に対応した入試の初年度となります。本要領では、高校の各教科で育成すべき資質・能力として、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱が示されており、その柱を基に各学校において日々の教育活動も行われていることと思います。大学入試においても、このような資質・能力を総合的にみるために、総合型選抜等の多様な入試が実施され、個別試験等においても、自分が得た知識・技能を基にして思考する力、判断する力、表現する力を問う出題形式になってきています。また、大学入学共通テストでは、令和七年度入試から新たに「情報Ⅰ」が設定されるなどの変更があります。このことを受けて、各学校ではこれまで共通テストに向けた対応の準備が進められてきたところであると思います。

一方では、中教審の高等学校教育の在り方ワーキンググループは中間まとめ（令和五年八月）の中で「これからの高等学校の在り方に係る基本的な考え方は、高校教育の実態が地域・学校により非常に多様な状況であるため、質の確保・向上に向けて、『多様性への対応』と『共通性の確保』を併せて進める必要がある。」としています。「多様性への対応については、地理的状況や各学校・課程・学科の枠にかかわらず、いずれの高校においても多様な学習や学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現に取り組むことが特に重要です。また、共通性の確保については『自己を理解し、自己決定・自己調整ができる力』の育成、『自ら問いを立てて、多様な他者と協議しつつ、その問いに対する自分なりの答えを導き出し、行動することのできる力』の育成など四つの項目に取り組むことが重要である。」としています。本県の高校教育でも同様であります。また、各地区で違いはありますが、令和九年度を境に県全体の中学校を卒業する生徒数が減少していきます。自校の教育の活性化とともに県内の教育振興については教育に携わる者皆で考える必要があります。私自身、目の前の課題を一つ一つ解決し、明るい未来を信じて教育活動を進めていきたいと考えています。

令和６(2024)年 ８月号
一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679
(有) アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

＊おもな内容＊

巻頭言 …… 1
随想 …… 2
提言 …… 3
わが校の学校経営 …… 5
子どもが輝く教育 …… 7
心に残るひとこと …… 9
ある日の校長講話 …… 11
話のひろば …… 13
読書案内 …… 15
趣味・文芸 …… 18
郷土の紹介 …… 19
専門部だより …… 20
編集後記 …… 20

随想

身近にある伝統産業『印染』

亀﨑染工有限会社
代表取締役社長
亀　﨑　昌　大

印染とは（しるしぞめ）あるいは（いんせん）と読み、織物に特有の文字や紋章、マークなどを染め付ける技法、またはその技法を使用する職種を示す言葉です。その歴史は平安時代にさかのぼるといわれています。

暮らしの中にあり、様々なシーンで目にする「印染」。ひとくちに印染めといってもその製品、技法は多岐にわたっています。

引染、捺染、注染、侵染などのそれぞれに手作業で行われる伝統に裏打ちされた染色技法にはじまり、最新技術を取り入れたデジタル染色まで、印染めの世界は多様な広がりを見せています。

古くから商いの目印として使われてきた暖簾、街中の幟、神社仏閣の奉納旗や幕、五月幟や大漁旗、学校の校章旗、会社の社旗、百貨店やデパートの懸垂幕、祭の半纏・法被や衣装、手ぬぐい、風呂敷、前掛けなど、我々印染め業界で扱っている製品は日常生活の中に溶け込んでいます。しかしながら、これらの製品が何処でどのように作られているかというのは、あまり知られていないのが現状です。

戦前に全国で約一万四千あった印染業者が、平成に入り約千四百件となり、平成二十五年には約四百件にまで減少しており、現在では三百件ほど。鹿児島県内で一九九〇年頃には十社ほどあったが現在はその半数で、いちき串木野市では亀﨑染工のみとなっています。

弊社の主力商品である大漁旗と五月幟の二品目は少子化や生活環境の変化、漁業関係者の減少や衰退などで、近年受注が減少傾向になっている状況です。既存製品のPRだけではなく新たなニーズを捉え、屋内で飾れる節句用品や大漁旗を作る伝統技法は変えずに、デザイナーとのコラボレーションをして新しい小売りブランド「亀染屋」と、様々なお祝い事、ハレの日に使っていただける「祝の印」を立ち上げ、新商品作りも積極的に行っています。

これまでにも試験的に地元の幼稚園児、小学生、留学生、その他地域の方々に工場見学や大漁旗制作のワークショップなどを行ってきました。フランス、香港、台湾でも同様のワークショップを開催し、日本の伝統文化の体験や伝統的なものづくりにおいての職人技とふれあえる時間「トキ」、自分で染めるという体験「コト」への評価と共感は万国共通の価値観だと確信できました。

「モノ消費からコト消費へのニーズ移行傾向」は近年の成長市場であり、コロナ禍及びアフターコロナの世の中ではその傾向はより一層増す可能性が高いと考えました。アフターコロナのインバウンド需要の取り込みも視野に「新たなコト消費・トキ消費を創造するための事業」に取り組み、社屋に隣接しておりしばらく縫製作業場として使用していた築八十年の家屋部分と使われていない中庭を体験ができる展示ギャラリースペースに改装し、昨年春にブランド名だった「亀染屋」を屋号としてオープンしました。

印染の長い歴史は只々古いものを頑なに残すことだけではなく、その時々の文化風習や環境の変化に柔軟に対応してきた技術や思考があったことの証だと思います。先にも記しましたように衰退の一途をたどるこの業界ですが、逆の目線で見ますと「長い歴史とその技術を持つ同業者が三百件も残っている。」とも見ることができます。

私は四人の子供に恵まれ、末っ子は小学校六年生です。社会の変化が加速度的に速くなっているように感じます。そんなこれからの社会を柔軟に渡り歩けるように学校教育の現場でも子供たちに様々な価値の捉え方ができるように、より多くの体験の機会が増えることを期待しています。

略歴

一九九二年　岐阜県の同業者の下で修業開始
一九九六年　亀﨑染工有限会社入社
二〇〇四年　亀﨑染工有限会社代表取締役
鹿児島県印入染色組合会長・
九州染色業連合会副会長・
九染連旗若会会長を歴任
二〇二〇年　全国青年印染経営研究会
第十四代会長を二期四年務める

職員自らが取り組む業務改善を目指して

川内小（北）　中川路　和　孝

一　はじめに

朝、校庭で先生と子どもたちが、長縄八の字跳びに取り組んでいる。先生が縄を回しながら記録をとっている。「やめ、二百二十回。」子どもたちが、「やった、新記録だ。」と声を上げる。近くで応援している私も心から嬉しい気持ちになる。ある朝のちょっとした出来事だが、このささやかな時間の共有こそ、私が業務改善に取り組むモチベーションになっている。

二　目的の明確化

業務改善については、職員自らが課題意識をもち、改善に向けて主体的に取り組むことが望ましい。ただ、これまで身に付いた働き方を見直すのは容易なことではない。

まず、何のために業務改善を図るのかという目的を示し、職員が納得することが大切である。我々教師が心身共に健康で、子どもたちとしっかりと向き合い、質の高い教育を継続して提供できるようにすることが業務改善の目的である。このことをいかに自分事として職員に理解させるかがポイントとなる。

中教審による提言「教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策」を基に、「学校・教師が担う業務に係る三分類」について共通理解を図ることにした。これまで学校や教師が当たり前のように担ってきた業務、とりわけ「基本的には学校以外が担うべき業務」については、これまでの慣例や業務の在り方に関する考え方を改めることの必要性を説き、議論を通して職員の理解を深めることができた。

三　組織づくり

職員は、日々の業務に負担感を感じつつも、現状をそのまま受け入れている。業務改善は、みんなの課題であり、みんなで知恵を出し乗り越えていかなければならない。もちろんボトムアップによる業務改善が望ましいが、状況によっては、管理職がリーダーシップを発揮する必要がある。職員の声を拾い、負担感に寄り添いながら自校における業務改善の阻害要因を集約し、課題を焦点化した。大別した課題を解決するために、いくつかの作業部会を編成し、それぞれに推進リーダーを配置した。具体的な改善については、推進リーダーを中心に取り組ませ、いわゆる「やらされ感」を払拭するようにした。

四　具体的な取組

教育課程や家庭学習の在り方、集金方法に関することなど、保護者の理解も得ながら大きく仕組みを変える必要性があったことから、教育課程編成の時期に併せて、改善策を話し合った。改善策を話し合う中で、予備時数の見直しや業者による直接集金など、いくつか試験的に試みた。家庭学習を自学へ切り替え宅習帳の提出を求めないことなどにも取り組んでみたが、いきなり低学年から自学を始めるのは難しいということなども分かった。

令和五年度に話し合われた業務改善策は、具体的な形となり、新年度に引き継がれた。教頭、事務職員が中心となり導入した民間の集金代行システムは、担任を集金業務から解放し、大きな業務改善に繋がっている。また、自学については、学年ごとに「自学の手引き」を作成し、学年に応じた取組を始めている。低学年については、保護者の協力を得ながら自学の習慣化が図られつつある。

五　おわりに

六月のある朝、教務主任が「自校の業務改善の現状」というレポートを持ってきた。次年度に向けたロードマップと現在の立ち位置が示されていた。今後、職員から業務改善に係るアイデアや意見を集め、さらに、改善に繋がる取組を推進したいという意思表示だった。トップダウンによりきっかけを与えた本校の業務改善であったが、今まさに職員自らの課題として、しっかりと認識されているという手ごたえを感じた。今はまだ道半ばの業務改善ではあるが、今後も職員と一緒になって前へ進めていきたい。

「教員も子どもも幸せな学校」を目指して
～「学校の当たり前」からの脱却～

佐仁小（大）　根　釜　文　子

一　はじめに

『学校は戦後最大の転換期を迎えている』と言われて久しいが、学校現場は明治の学制以来、教室の姿形は変わりなく、大正時代末に全国に普及した小学校の制服も、気候変動も何のその、未だに着用され続けている。「こうあるべき」という「学校の当たり前」や「脈々と受け継がれてきた意識」に焦点を当て、学校が様々な課題を抱えるに至る原因を明らかにしながら、教師も子供もウェルビーイングな状態で居られる学校を目指したい。

二　働きやすく働きがいのある学校

組織では、オープンで風通しがよく、協力的で全員の意見が尊重されることが働きやすさや働きがいに繋がっていく。その土台となるのが、「挨拶・感謝・賞賛・互助・コミュニーケーション」である。これらを日々コツコツと積み重ねることでしか組織は変われない。逆に組織を歪めるのは「圧」である。行政から、管理職から、同僚から、保護者から、子どもから等々。過剰で不適切な「圧」は、話合いによって早急に解消すべきである。

三　学級観

学級担任は、愛情と責任感を持って子どもや保護者対応に全力を注いできた。しかし、今や多様なニーズに応じようと必死に頑張った結果、精神疾患に陥る教員が後を絶たない。そこで小学校では中学校の在り方を参考に、「教科担任制」「副担任制」「学年チーム担当制」等その学校にあった複数人で一つの学級を支える体制作りが急務である。それによって、子どもは複数の教員に見守られる安心感、教員は一人で抱え込まず子どもを多方面から見つめながら支え合える連帯感の中で、学級経営を行うことができると考える。

四　教師観・子ども観・教育観

「教師は、子どもを力強く導かなくてはならない」という思い込みを捨て、「子どもたちが自己実現するために、自己選択を支援する伴走者」という認識を持つべきである。一人一人違う子どもたちを揃えよう、型にはめようとするのではなく、その個性を大切にしながら「思いや願いを引き出し、それを叶えるために寄り添う」という教育観が重要である。

五　授業観

子どもの多様性が顕著になり、一斉授業において、限られた時間で、同じ内容について、全員を同じレベルまで到達させることは困難を極めるにもかかわらず、それに挑戦し続け、皆と同じであることを過度に強要する場になっていないだろうか。その脱却のため、現行学習指導要領総則第４では、個別最適な学びとして「指導の個別化」「学習の個性化」を謳っている。また、やっと自由進度学習が脚光を浴びてきた。そうすると着地点も子ども一人一人で違ってよいのではないだろうか。子どもの個性ある学びが豊かに展開されるよう、いかに支援するかに心を砕きたい。

六　おわりに

学校は「子ども真ん中」「子どもを主語に」と言ってはいるが、従順で一糸乱れぬ服装や整列ができ、集団としての徹底管理時代の没個性教育から完全に脱却できているだろうか。その答えは、小中学校で約三十万人に膨れ上がった不登校の子どもたちが身をもって教えてくれている気がしてならない。子どもたちが心地よさを感じ、臆することなく自分を発揮できる場であるか、教師が働きやすく働きがいを持てる場であるか。それを阻害している目に見えないものについて、勇気を持って議論していきたい。学校が現代に即するのはもちろん、未来に生きる子どもたちが育つ場であることを、私たちは決して忘れてはならない。

わが校の

学校経営

子供が主役の学校を目指して

宮小(市)　郷原光徳

一　はじめに

本校は、鹿児島市の北部に位置し、創立一四五年を迎える歴史と伝統ある学校である。八年程前には、児童数が五十人を割り、中・高学年で複式となるなど減少の一途を辿っていたが、現在は全校児童九十人、学級数は九学級の小規模校である。校区には県総合教育センターや県青少年研修センター等もあり、校区コミュニティを中心に教育に対する関心は高い。学校行事等に校区が積極的に関わるなど、支援や協力を惜しまない地域である。

二　学校経営方針

本校では、教育目標に「創造性」・「社会性」・「自律性」の三つを掲げ、その育成のために必要な能力を次の内容で設定している。まず、創造性では「思考力・判断力・表現力」、「問題発見・解決能力」、「情報活用能力」を、次の社会性では「コミュニケーション能力」、「自治活動能力」、「尊敬・尊重」を、そして、自律性では「自己指導能力」、「メタ認知能力」、「言語活用能力」を、教育課程に重点化して位置付け、全教育活動を通して育成するようにしている。この教育目標の設定にあたっては、職員研修や職員会議、学校評価等で話題になった子供の課題や育成したい力などを基に、職員とワークショップ形式で協議し、キーワードとして取りあげられた内容を共有して決定したものである。

三　「教える」学校から「自ら学ぶ」学校へ

三つの教育目標で最も大切にしている内容が「自律」である。「自律」とは、自分で考え、判断し、行動できる子供の姿と考える。

学びにおいて子供を当事者とし、能動的に関わらせる方策が必要となる。そこで、この具現化に向けて本校では「子供が主語の授業」を教科等学習（指導）の基本に、学習者主体の学習活動の実践に努めている。取組では、課題設定における発達段階に応じた指導の下、学びの形態として低学年ではペア・グループ学習を、中学年以上では小規模校ながら少人数・習熟度別学習や自己調整学習（自由進度学習等）にて学習を展開している。なお、これまでの実践からより深く学ぶための工夫が必要であるとの意見があがり、今年度は主要教科の単元導入時にオリエンテーションを位置付け、学習内容を概観させ、学習の目的や目標、ゴール等の見通しを子供にもたせるとともに、協働的な学びの場を子供の状況に応じて自由に選ばせ深く学ばせるよう「自由深度学習」と名付け、実践を進めている。

四　特別活動と教科等における往還的な学び

子供が学びを深めるには、自分の考えや意見を他者と述べ合ったり聞き合ったりする話合いの場や質が重要となる。事実、ラーニングピラミッドでもその有効性が示されている。このことは、「子供が主語の授業」においても重要な内容である。そこで、本校ではその学びのための方策として、各教科等で身に付けた資質・能力を総合的実践的に活用するとともに、学級活動（話合い活動）で身に付けた資質・能力を教科学習で活用し、生きて働く汎用的な力に高めることを目的に、特別活動と教科等の往還的な学びの研究を行っている。様々な集団活動を通して課題を見い出し解決するための方法を話し合い、合意形成や意思決定して実践することで、学校生活の充実と向上が図られるとともに、生徒指導にも有効に働くことを期待している。

五　おわりに

現在、「社会に開かれた教育課程」を通して、育成すべき資質・能力を明らかにするとともに広く社会と共有し、地域と連携・協働しながら教育目標の達成を目指すよう求められている。このことと関連して、鹿児島市では令和五年度から学校運営協議会制度が、そして、今年度から「未来を創造する力を育む非認知能力向上プロジェクト」もスタートした。次代を担う子供のよりよい成長を目指し、制度を活用して、目標達成に向けて地域・保護者と協働して取り組みたいと考える。

わが校の

学校経営

太陽が丘　昇る朝日に　背を押され　未来に羽ばたけ　平山の子

平山小（熊）　雨田　まゆみ

一　はじめに

本校は「日本で宇宙に一番近い島、種子島」の南端、南種子町の東海岸に位置し、種子島宇宙センターロケット発射場にほど近い、創立一五〇周年を迎える歴史と伝統に裏打ちされた平山校区と共にある学校である。学校周辺は豊かな自然環境に恵まれ、国史跡の「広田遺跡」、県無形民謡文化財の「蚕舞」をはじめ、種子島民謡や民俗芸能が現在も唄い継がれ踊り伝えられている。

校区の人々は、その歴史と伝統に誇りをもち、学校教育に対しても関心が高く、極めて協力的な風土がある。

二　学校経営の基本方針

学校教育目標は、「夢をもち、自ら学び、心豊かでたくましい平山っ子の育成」である。キャッチフレーズに、「太陽が丘にあいさつの声ひびかせ　元気いっぱい　やる気いっぱいの楽しい学校」を掲げ、小規模校の強みを生かした教育活動を展開している。即ち、人権尊重や自己肯定感を育む活動を通して、学びに向かう力・人間性等を培い、学ぶ楽しさを味わう授業づくりに努めることで、一人一人の子供のよさや可能性を伸ばす教育活動を推進している。

三　目標実現に向けた具体策

㈠　人権教育の推進

本年度、「『人権の花』運動」に参加し「太陽のような優しさをもって笑顔の花を咲かせよう」のスローガンを掲げている。人権を象徴する花、ヒマワリの栽培を通じて命の尊さや人権を尊重する思いを育んでいく。全校で花を育てる中で、忘れずに水をやったり草を取ったりしながら協力や助け合いの大切さを体験的に学んでいる。

また、発達段階（学年部）に応じた人権学習等、学校で展開する子供の学びを家庭や地域に広げていくことも学校の役割の一つである。学級ＰＴＡや家庭教育学級等での周知や学習機会の確保・啓発等に努めている。一方、本校が加盟しているＪＲＣ活動の「気づき・考え・実行する」の態度目標と連動した教育活動も展開している。

㈡　主体性を育む授業づくりの推進

主体的な学び手の育成は、本校の課題の一つであるが、これまでの複式学習指導の研修の成果を生かしながら、子供の学ぶ意欲を高める工夫やＩＣＴ機器の効果的な活用等により、子供が学ぶ楽しさを実感する授業づくりに取り組んでいる。

同時に、ＰＴＡ理事会や全体ＰＴＡ等で学力（学ぶ力）についての説明機会を設け、家庭学習の考え方や内容等を整理・見直し実践している。具体的には、学期一回の家庭学習強調週間に学習時間や子供の意識を調査・分析しながら、一人一人に適した学習方法・手立てを決定できるよう丁寧に個別指導を実施する。このような実践を積み上げることで、子供が自分の得意・苦手なところはどこか、得意なところを伸ばすためにはどのような学び方がよいか等をメタ認知できる力を育成していく。

四　おわりに

本校の一日の始まりは、学校のシンボルである「太陽が丘」から大きな声であいさつをし、自分の目標を宣言することで始まる。長く続くこの取組は、本校卒業生の様々な世代が共通してもっている小学校時代のよき思い出でもある。本校が大切に紡いできたこの伝統的な教育理念を継承しつつ、学校と家庭が一致協力し、地域の方々に支えられながら、これからの時代を生きる平山の子供たちの健全な育成に向けて、学校づくり・地域づくりの推進に、更に心を込めて尽力したい。

地域の宝として輝く子どもたちに

高隈小（隅）　水本賢一

一　はじめに

本校は、明治九年に鹿児島県第七十三郷校から高隈小学校に改名し、令和六年度、創立百四十八周年となる。ここ数年、児童数は十五人前後で推移している。本年度は、全児童数十二人の極小規模校である。

本校区は、高隈山地の東側山麓、標高約百mに位置し、校区の中央部には串良川が流れ、その流域に沿って集落や耕地が細長く広がっている。串良川の上流の大隅湖付近には、外国から研修生が訪れる鹿児島県アジア・太平洋農村研修センターがあり、研修生と児童とが国際交流を深めている。

二　取組の実際

㈠　鹿児島県アジア・太平洋農村研修センターとの交流

鹿児島県アジア・太平洋農村研修センターの研修生との交流を通して、外国の文化に対する関心と理解を深めると共に、進んで外国との交流を図ろうとする態度を育てる目的で実施している。昨年度は、一回目で、パラグアイ、ブラジル、中国の研修生と交流をした。児童は、英語で自己紹介した後、国体ダンスや昔遊びで交流を深めた。二回目は、韓国のトクソン女子大学の女子大生二十人と交流した。女子大生によるKポップダンスの披露や児童とのドッジボール対決で大いに盛り上がった。本校児童が韓国語であいさつすると、女子大生が大きな歓声で応じる大変な喜びようだった。韓国の女子大生が韓国語を大切に思う気持ちが強く態度に表れていた。今後も外国との交流を通して、本校児童にも、他国の文化や伝統を大切にする気持ちを持つと同時に、自分の国を愛する気持ちも育てたい。

㈡　三校合同運動会

高隈中学校区の児童・生徒数の減少に伴い、単独での運動会開催が難しくなったため、令和二年度から大黒小学校、高隈中学校と三校合同で運動会を開催している。中学生の運営進行に関わる態度や競技演技に真剣に取り組む姿がすばらしく、小学生の手本となっている。中学生との交流は、中学校生活への不安を取り除き、中一ギャップの解消になっている。

㈢　新聞投稿

児童の作文表現力の向上と新聞に掲載されることで自信を付けさせるために、南日本新聞に詩や作文の投稿を積極的に行っている。その結果、昨年度「子供のうた」の欄に五回、「若い目」の欄に七回掲載された。さらに、投稿作文の内容や継続性を鑑み、南日本新聞社の「若い目学校賞」を受賞した。地域の方からも、「新聞を見るのが楽しみになった」、「高隈に住んでいる者にとって頑張ろうという力になる」という喜びの言葉をいただいた。本校は、特認校制度指定校として、転入学児童を募集しているが、高隈のよさのアピールにもなっている。

三　おわりに

ゴールデンウィーク明けの午後にプールの床面を掃除していると、「校長先生、手伝いましょうか。」と、上学年児童が声をかけてくれた。「昼休みだから遊びなさい。」というと、「遊ぶよりもプール掃除がしたいです。」と言って、乾燥した汚泥を集めたり、一輪車いっぱいになった汚泥を運び出したりしてくれた。子どもたちが一生懸命手伝ってくれる姿に胸が熱くなった。途中、「校長先生、高隈小は、青少年赤十字加盟校だから、ぼくたちは、『気づき』『考え』『実行する』ができていますね。」と言われ、感動の連続だった。保護者、地域に支えられ、高隈小では、校訓にある「心豊か」な子が育っている。

未来の創り手となる生徒の夢実現に向けて

与論中（大）　吉松浩志

一　はじめに

鹿児島県最南端に浮かぶ与論島は、珊瑚礁が隆起してできた島であり、四方を透明度の高い海に囲まれ、その自然の美しさは「東洋の海に浮かび輝く一個の真珠」と讃えられる。

本校は、与論島唯一の中学校であり、島全体が校区である。茶花小、与論小、那間小の三小学校から集まる生徒数は百六十二人、十学級で教育活動を進めている。

二　取組の実際

㈠　海洋教育科「ゆんぬ学」

与論町では、令和四年度から、全ての小・中学校に海洋教育科「ゆんぬ学」を設置し、与論の自然環境や伝統文化、歴史、観光など与論島の海とくらしの課題について探究する学習を行っている。

具体的な取組として、一年生は地域サポーターを講師に招き、海洋ゴミに関する話を伺ったり、海岸の清掃活動や海での体験活動を行ったりするなど、郷土の大自然に触れ、自然に親しむ心や自然に対する畏敬の念を育んでいる。

二年生では、国の重要無形民俗文化財に指定された与論十五夜踊りを通して歴史や文化を学び、与論の魅力を再発見する学習を行っている。

さらに、三年生では、二年間の活動を通して島の抱える課題について考え、解決策や対応策をレポートにまとめることで、地域の発展に貢献する学びへとつなげている。

また、この学習で仕上げたレポートは、与論高校への入学者選抜時に提出し、与論高校の総合的な探究の時間「ゆんぬ」に接続している。

㈡　連携型中高一貫教育

平成十年度から連携型中高一貫教育校として、与論高校と中高一貫教育を進めている。生徒の実態を把握し、早期に信頼関係を築く目的で相互の教職員が乗り入れ授業を行っている。さらに、英語検定や漢字検定を合同で実施したり、高校で行われる教育講演会、ゆんぬ校内発表会、合格体験発表会等に、中学生も参加したり、部活動では協同で練習会を行ったりすることで、生徒同士の交流も積極的に促進している。

㈢　大牟田・荒尾地区与論会と宅峰中学校との交流

与論島は一八九八年に台風被害による凶作で大飢饉となり、かつて石炭の積み出し港だった口之津（長崎）に一千人を超える島民が集団移住した。さらに、三池港開港に伴い、その内半数以上が大牟田（福岡）に再移住したという歴史がある。

移住先での様々な困難を乗り越え、大牟田の発展に寄与した先人たちの歴史を本校では一・二年生で学んでいる。修学旅行では与論島の出身者を追悼するため、大牟田市内の納骨堂「与州奥都城」を訪れ、先人への思いを込めて黙とうをささげている。また、この訪問の際、地元の宅峰中学校の生徒と採炭の苦労をつづった楽曲「黒いダイヤの涙」を合唱するなど、交流を深めている。

㈣　地域部活動

令和三年度から、休日の部活動の地域移行を開始し、現在、サッカー部、吹奏楽部、野球部、卓球部で地域指導員による部活動指導を実施している。教師の負担軽減、部活動の専門性と持続性の向上という点において効果を上げている。

三　おわりに

海洋教育学をはじめとする特色ある教育活動を通じて、生徒は与論島の素晴らしさを理解し、将来にわたって必要とされる知識や知恵、豊かな心とたくましい体を育んでいる。

本校の校訓でもあり、与論島に昔から重んじられてきた「誠」の教育を大切にしながら、ますます学校、保護者、地域と連携し、学校教育目標である「未来の創り手となる生徒の夢実現に向けて、確かな学力と豊かな心を育てる」取組を推進していきたい。

心に残るひとこと

今を生きる！

大明丘小（市）菊　谷　俊　一

今からさかのぼること〇十年前、薩摩川内市の学校に赴任した。当時、薩摩川内市では、小中一貫・連携教育の推進や教職員ボランティアグループの発足等、様々な施策・取組が行われていた。その中の一つとして、将来、日本規模・世界規模の広い視野で物事を考え、自分を磨き、郷土薩摩川内市に大いなる元気を与え、貢献してくれる人材を育成することを目的に、現在も続いている「薩摩川内元気塾」の施策が始まった。

当時の勤務校でも、講師として幅広いジャンルの方々に、貴重な講話や実技等をしていただいた。鹿児島を中心に戦争体験者に取材した話や特攻隊など、戦争を題材にしたひとり芝居を上演されていた女優「たぬき」こと、故　田上美佐子さんもその中のお一人であった。

当時、すでに体調を崩し病と闘われていたが、子どもたちのためにと講演を快く引き受けてくださり、

「生きたくても生きることが許されなかった時代もありました。今は、体がきついなと感じるときが多くなってきました。けれど、今私はとても幸せです。」、「言葉はとても大事なものです。使い方によっては幸せになったり、幸せにさせたりすることもできます。しかし、使い方によっては不幸せにもなれるのです。生きている以上は、素敵な言葉を使いたいですね。」と、一人一人の心に染み渡る素敵な話、そして一人芝居を演じてくださった。

講演後に、「先生も今を精一杯生きてくださいね。」と、次の詩を紹介してくださった。

－今を生きる－

「いやだな　面白くない
　ダメだ　できない　最悪・・・」
生きていない言葉です
思っている方向に進んでしまいますよ
今を生きている人は
「ありがとう　うれしい
　感謝　できる　最高・・・」
こんな言葉が出てきます
同じ一生なら　生きた言葉を使い
悲しみも喜びに変えて
今を生きたい　今を生きよう　今を生きる

今を生きるためには、生きている言葉を使うことが大事である。

「ありがとう　うれしい
　感謝　できる　最高・・・」

自分や人を幸せにする言葉が、今まで以上に溢れる素敵な家庭、学校、地域をめざしていくために、今も大事にしている言葉である。

「井の中の蛙になったらいかんど。」

加治木小（姶伊）田　畠　正　英

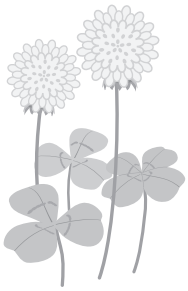
初任校の養護学校（現特別支援学校）では、重度・重複学級や重複学級など、一人一人の子どもの実態に合わせながら、指導方法を工夫していくという貴重な経験をさせていただいた。一方で、小学校での教科指導や学級経営にも興味があった。私は、幼い頃から音楽が好きだったので、バンドや合唱の指導もしてみたかった。

初任校で四～五年が過ぎた頃、このまま特別支援教育の道を追究していくのか、それとも、小学校での経験を積み重ねていくのか迷った。というのも、当時は、交流期間三年で原籍校に戻る「教員交流研修」という制度はなく、校種を変わる「校種間交流」という制度しかなかったのである。同期ともそのことがよく話題にあがった。

飲み会のときに、ある先輩から言われた言葉がある。「井の中の蛙になったらいかんど。一度はこの世界（特別支援教育）を出て、外から見らんといかん。両方を経験することで、子どもたちの見方も変わるし、仕事の幅も広がるから。」と。

私は、悩んだ末、思い切って小学校の世界に飛び込んで挑戦することにした。あれから約三十年が過ぎた。あっという間だった。自分の望みどおり、学級担任をしながら金管バンドの指導もすることができた。大変なこともあったが、充実した日々であった。養護学校での五年間の経験があったから、一人一人の子どもの実態がよく見えるようになったような気がする。在外日の教員に挑戦しようと思ったときにも、先輩に言われた「井の中の蛙になったらいかんど。」という言葉が思い出され、後押ししてくれたような気がする。

この言葉は、今でも私の根底に流れている。自分の転機となるような挑戦をするかどうか迷ったとき、何かを決断しなければならないとき、当時の先輩の声が今でも聞こえてくる。「井の中の蛙になったらいかんど。」この言葉は私を後押ししてくれる大切なひとことである。



「正直は宝だ」

伊敷台中（市）亀　山　浩　一

私が再配で赴任した奄美大島の中学校に、いつも白いシャツ、白いズボン、白い靴を身に付け、生徒への指導は一本筋が通り、曲がったことは嫌い、身の回りはいつも清潔、存在感のあるS先生がいた。近くを通ると、生徒だけでなく私まで背筋を伸ばしたくなる尊敬すべき先生だった。普段「ヤンチャ」をしている生徒たちも、S先生の前では、しっかりした態度をとるほどであった。当時、初めてバスケットボール部の顧問をした私は、隣の中学校とよく合同練習をしてもらっていた。隣の中学校には、顧問のほかに競技経験豊富なAコーチがいた。話をしていくと、Aコーチは同じ年ということが分かり、気心も知れて仲良くなり、夜には屋仁川で部活動の話や人生について語ることも多くなった。

そんなある日、話題がS先生のことになった。Aコーチは中学時代にS先生の授業を受けており、当時から厳しく存在感のある先生だったそうだ。夏休みのある日、友達数人と自転車の二人乗りをしていたところをS先生に見つかった。S先生が立ち止まり、こちらを見ていることに気付いた周りの友達は、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。ただ、中学生だったAコーチだけは叱られるのを覚悟で、その場に残った。S先生に自ら近寄っていき、震える声で、絞り出すように「すみませんでした。」と何とか言えた。厳しく叱られることを覚悟していたが、S先生は、声を荒げることもなく、「みんなが逃げる中で、お前だけ残ったな。正直は宝だ。その気持ちを忘れるな。」と言って、何のお咎めもなく、その場を去って行ったそうだ。

この話を聞いて約三十年経った今でも、悪事を働いて、正直に申し出てきた生徒がいると、この話を思い出している。「正直は宝だ。」

「人のために汗をかく」
～サッカーから学んだこと～

伊佐農林高　新　坂　尚　孝

本校に赴任して約三か月が過ぎようとしていますが、先輩の校長先生や同じ新任校長先生、そして、同僚の教職員ほか多くの方々に支えていただきながら日々職務を遂行しています。

さて、平成元年から始まった私の教員人生ですが、今まで多くの人たちとの出会いのなかで心に残る言葉はたくさんあります。私自身人生で大切なことは、ほとんどサッカーを通して学んだ気がします。そんなサッカーとの関わりのなかで、私は三十代のはじめ頃、本格的にサッ

カーの指導者を志し、戦術やプレーの構造を科学的に考察するため一冊のサッカー指導者専用月刊誌を購読していました。指導者としての方向性を模索していた時、ある中学校の先生が、「サッカーは、人のために汗をかくスポーツである。」と書いていました。味方の「ミス」を予測して、常にリスクマネージメントをしながらプレーすることが大切であるというような内容でした。サッカーにおいて一人の選手がボールに触れる時間は、一試合九十分中わずか二～三分足らずと言われています。あの世界的プレーヤーのネイマールやメッシでさえ、オンザボール（ボールを保持している時間）に必ずミスをしてボールロスト（ボールを奪われる）するのです。ブラジルやレアル・マドリードなどサッカー界でファーストランクと呼ばれる国々やクラブチームには、必ず世界的名選手がいますが、そこには名選手の陰に隠れて、常にチームのために献身的に働く、つまり「人のために汗をかく」選手がいます。

選手には、チームの戦術や戦略において、それぞれのポジションごとに役割があり、互いに「ミス」をカバーし合いながら勝利に向かって全力を尽くします。学校に置き換えて考えてみると、目標を設定し、組織を統轄して学校をマネージメントするのが校長の役割ですが、同時に私は、自分自身が先頭に立って生徒・職員・地域の方々にとって常に「人のために汗をかく」校長であり続けたいと考えています。

ある日の校長講話

挨拶があふれる学校に

川床小（北）黒　川　周　一

毎朝、正門で元気に挨拶を交わしてくれると、楽しく学校に来てくれていると感じられてうれしくなります。しかし、挨拶が返ってこなかったり、元気がなかったりすると、心配になります。「おはようございます」のたった九文字の言葉でもいろいろなことが伝わってきます。

さて、みなさんは、挨拶はどうして大切だと思いますか。挨拶をしたり、されたりしたときのことを考えてみてください。挨拶したときも、されたときも、心が温かくなりうれしくなるのではないでしょうか。これは、挨拶を交わすことで、自分も相手も大切にされていると感じられ、心が元気になるからだと思います。挨拶は、お互いが気持ちよく過ごすことができるように、相手を大切に思う気持ちを表現することです。つまり、「あなたを大切にしますよ」というメッセージを相手に届けることなのです。挨拶というメッセージを届けることで、お互いの心と心を結ぶかけ橋になってくれます。しかし、「おはようございます」と、声だけの挨拶で心と心が結ばれるのでしょうか。学校の玄関近くの立札に「自分から」「元気よく」「おはようございます」「語先後礼」という言葉が書かれています。「語先後礼」とは、「言葉を先に、礼を後に」という意味です。挨拶の際に相手に対して向き合い、挨拶の言葉を発してからお辞儀をするという動作のことです。挨拶の際に言葉と動作を同時に行うと、礼をしながら言葉を発してしまうため、相手を見ずに地面を向いた状態で挨拶をしてしまいます。挨拶は、相手のことを大切にしていますよというメッセージを届けることだと話しましたが、これではそのメッセージを届けることが難しくなります。友達とよりよい関係をつくっていくために挨拶は、大切なはじめの一歩です。挨拶を通じてお互いを思い、大切にし合うことで、よりよい関係づくりにつながります。ぜひ皆さんで、気持ちよい挨拶があふれる学校にしていきましょう。

たっぷりの睡眠で
生活リズムを整えましょう！

住吉小（大）牧　口　廣　久

今月は、脳の話に触れてみたいと思います。脳の働きを簡単に言うと脳は、三階建てでできています。一階は「生きるための脳」です。呼吸や心拍、体温の調節など、生命を維持するために必要な働きをしています。二階は「感じる脳」です。喜怒哀楽や味覚・嗅覚等をつかさどります。三階は「考える脳」です。論理的に物事を判断したり、自分の気持ちをコントロールしたりしています。生活習慣を整えることで、脳が元気になり、機嫌が良くなり、賢くなります。生活習慣を整えるためには睡眠をたっぷり取ることです。睡眠がたりないと、イライラしたり、キレやすくなったりします。集中力や記憶力、免疫力の低下など、心身にさまざまな影響を及ぼします。私たち人間は、朝の光とともに目覚め、夜の闇とともに眠る「昼行性の動物」です。夜になると眠くなるように体内時計がセットされています。小学校低学年であれば九時ごろに就寝できればいいですね。睡眠には、ノンレム睡眠とレム睡眠の二種類あります。ノンレム睡眠では、脳をしっかり休め、骨を伸ばしたり、筋肉を付けたりする成長ホルモンがまとまって出ます。レム睡眠では、脳が記憶を整理します。嫌なことがあったら、忘れよう忘れようと消去し、先生にほめられてうれしかった時は、残そう残そうと保存します。起床時間が遅くなると、その後の生活リズムに影響します。脳のある場所に、体内時計の発信基地があります。そこが毎朝、「一日が始まったよ」とリセットをかけます。リセットをかけるには、朝の光が必要です。起きる時間は、学校に行く一時間前を目安にしてください。起床後は、しっかり朝ご飯を食べて、脳と体を動かすエネルギーを補給しましょう。

睡眠を軸に生活リズムを整えて、「かしこく、元気に、機嫌良く」過ごせるようになることを願っています。

「始業式」他人との比較ではなく…、
昨日の自分を超えていけ『一歩前へ』

種子島中（熊）吉　松　孝　展

さて問題です。「雪が解けると何になるでしょう？」大人に聞くと大半の人は「水」になると答えます。以前私のクラスで目をキラキラさせて手を挙げた生徒が、雪が解けると「春」になります、と答えました。春が来ることを心待ちにしている様子がひしひしと伝わり、ほっこり心が温まりました。

今日のテーマは「言葉」です。あるクラスにこんな詩が貼ってありました。『言葉には力がある。あなたが発したその言葉は、プラスに生きるか、マイナスになるか考えよう！言葉を発する前に・・・』皆さんは朝起きてから、ここまでどんな言葉を使ってきましたか？「おはよう、ありがとう、元気？、めんどくさい、嫌だ、うざい」などなど。私もこれまで「言葉」を大切にしながら、クラス・生活指導・部活動でいろんな話をして、熱く語ってきました。言葉には魂がこもっています。人を明るく元気にさせ

たり、逆に人を嫌な気持ちにさせたり傷つけたりもします。言霊です。種子島に来てから、たくさんの優しい言葉と出会いました。いい学校・地域だなと安心しました。ぜひ皆さんも言葉を大切にして、優しい言葉をかけられる人になってみませんか。

さて、新年度のスタートにあたり、一つお願いがあります。それは、失敗を恐れずにいろいろなことに挑戦してほしい、ということです。私の好きな言葉で「一歩前へ」という言葉があります。中学時代は人生の中で心も身体も大きく成長するときです。失敗やつまずくことを恐れずに、前へ前へと進んでください。あなたが勇気を出して、踏み出したその一歩が、これからの人生をきっと素敵なものにしてくれるはず。「一歩前へ」、落ち込んだり、悩んだりしたときは、ぜひこの言葉を思い出してください。

話のひろば

今年もあの夏がやってくる

柊原小（隅）
竹井　敏秀

平成五年の春、私が初任校として赴任したのは鹿児島市立大明丘小学校である。その大明丘小学校には「火曜会」という自主学習団体があった。火曜日の放課後、校内にある公民館を借りて、約二時間の学習会を先輩方が企画・運営していた。私もその火曜会へ入会させていただき、教育のいろはを教わった。教科指導は勿論のこと、生徒指導など、その内容は多岐にわたった。教わったことを日々の教育活動で実践しようとするが、うまくいくはずもなく、先輩方から教師としての心構えや板書、声の出し方など厳しくも温かい指導を幾度となく受けた。あの時の先輩方の教えがあったからこそ、初任の四年間を無事に終えることができた。今振り返っても、懐かしい日々である。

実はその火曜会、三十年以上の月日が流れた現在も続いている。その当時の校長先生や教頭先生を慕い、賛同する先輩方が声をかけ合い、それぞれの近況報告会として夏休み期間中に「大火曜会」と名前をかえて開催している。私自身も時間が合えば必ず参加している。変わったことといえば、お互い年を取り、様々な役職で経験を積んだことだ。私が教頭になったときも、「きばらな、いかんど。」と声をかけてくださった。そして、職員指導の在り方や校長の補佐としての心構え、仕事への向き合い方を御教示くださった。校長になったときも、同様に褒め、励ましてくださった。

教員になって三十年以上の月日が経ったが、素晴らしい先輩方に巡り合い、本当に幸せな教職員人生だと思う。

今年もあの夏がやってくる。先輩方にどんな近況報告をしようか、先輩方からどんな話が聞けるのだろうか。今から、楽しみで仕方がない。

生生流転

川上小（日）
牧　健一

川上小学校に新任校長として着任した春、知らない男性から校長室に直接電話があった。男性はやや興奮しながら「君は〇〇先生の息子さんではないか。私は〇〇先生に大変世話になった者だ。」と話を切り出したが、それは私の父の名ではなかった。その誤解を解くと、男性は手紙を送ると言い残し、早々に電話を切った。数日後、達筆な手紙が届いた。それは昭和五十五年に川上小校長を務めた人物からの手紙だった。

手紙には、校庭の百周年記念碑にまつわる事実が記されていた。当時、体育館が新築され、保護者や地域住民との盛り上がりの中で、百周年記念事業も三年前倒しで行われたという。百周年を待たずして建てられた碑のことを正しく伝えるよう願っていた。

どおりで創立七十五周年と百周年の計算が沿革史で合わなかったはずだ。私が赴任した年は、実は百四十周年記念にあたる年だったのだ。学校運営協議会でこの話題を出すと、今からは祝賀の準備はできないと先送りになった。しかし、このことをきっかけに、記念碑のある築山が気になり始めた。それから、築山の整備も目標の一つとなった。

あれから、二年半が過ぎた。密林のように成長していた蘇鉄群や周囲の樹木を大幅に伐採した。すると、外からも築山の二宮金次郎像や由来不明のモニュメントが見えるようになってきた。すると、ある日、蘇鉄の伐採中に見知らぬ家族が来校した。その父親がモニュメントの制作者だった。たまたま通りかかり、外から見えたので立ち寄ったそうだ。その時、学生時代に師事した教授（中村晋也氏）の依頼で、友人と泊まり込みで制作したことを明かした。また、一緒に制作した友人は後に彫刻家となり、ザビエル公園の像を手がけたという。生い茂っていたツツジも地元の庭師の手により剪定され、築山はかつての面影を取り戻しつつある。

全ては先輩校長の一本の電話から始まった。今でも勤務した学校のことを想うその生き方には頭が下がる。私は年齢が合わないと思い、私が生まれる前に他界した校長だった祖父と、電話の〇〇先生が同名であることを言わなかったことを、少し後悔している。

「格好良さ」

野田女子高
加藤　寛一

私が長く携わってきた空手道には「組手」と「形」がある。組手とは正に相手と対峙して、突きや蹴りを出し、相手の決められた部位を攻撃しながらポイントを重ねていく一対一の競技。一方、「形」は、仮想の相手を意識して、攻撃や防御を正確に力強く組み合わせた演武で、その正確さや力強さ、そして品格や美しさまでも勝敗の基準となる。故に、「形」では、力強さと正確さに加え、美しくも品のある演武をした者が勝者となり、選手はその技量を身につけるために、何十時間・何百時間、何百回・何千回と反復動作を繰り返すことになる。新体操やフィギュアスケートと通じるものがある。結果として、一流選手になると、普段の立ち振る舞いにも品があり格好良い。

一方、『頑張れば感動』という言葉があるが、自分が精一杯頑張れたり、誰かの頑張っている瞬間に立ち会ったりした際に私たちは感動する。やる気のない人が自身で感動したり、周囲を感動させることはない。やはり頑張っている人はそれだけで価値があり、格好良い。

同様に、他者に敬意を払い、礼儀正しく立ち振る舞う人も品があり格好良い。人それぞれ格好良いと感じる観点や瞬間は違うかもしれないが、人の価値観や感性はその人の外見や立ち振る舞い、言動に現れる。即ちその人の人間性だ。「外見よりも中身」とも言われるが、そもそも外見と中身は連動しているし、内から外に現れる言動は、その人の内面の現れであるし、外見であるとも言える。外見とは何も見た目や服装だけを示す物ではない。そもそもその人の服装自体「相手への敬意」だとも評されるのだから。

空手道の「形」もそうであるように、形を整えることは、心を磨くことに繋がり、磨かれた心は自ずとその人の所作・言動となって、結局は外に形となって現れることになる。やはり単純に中身と外見を分けられないという話しだ。自分の言動がそのまま自分の見た目になることを自覚しさえすれば、内なる心で外見をも整えられることになる。だとすれば、自らの言動に配慮し、普段から相手に敬意を払い、無骨でも謙虚に品格を身に付けることはやはり大切だ。六十歳を前にして、これからは格好良く年を重ねたい。

読書案内

■三代達也　著

一度死んだ僕の、車いす世界一周

小山田小(市)野　元　忠　久

日本人は、優しくて礼儀正しい。特に日本人の礼儀正しさは、スポーツ選手などでも取り上げられるように、日本人のすばらしさとしてメディアが伝えている。サッカーのサポーターが、試合終了後、観客席のごみ拾いをして、注目を浴びたことも日本人の礼儀正しさや優しさとして世界から注目され、メディアでも取り上げられていた。また、日本国内を旅行するにも安全で、落とした財布が返ってくるのも、日本人の正直なところや優しさだと聞いたことがある。

筆者は、交通事故により車いす生活を余儀なくされた。それでも、積極的な筆者は世界一周の旅に出かける。そこで出会う数々の障害。それは石畳の道やリフトのこわれた観光名所など、車いすにとっては大きな障害である。極めつけは、イタリアでの出来事である。車いすの前輪が外れて動かないというハプニングが起きた。たった一つのねじがはずれてなくなっただけで車いすはびくとも動かない。しかし、周りはそれをほっとかない。どうしたと声を掛け、ねじが外れていることが分かると、家族で分担し、ねじを探す父親と子供、レンチを自転車屋さんに借りに行く母親、それを見ていた周りの人々も一人一人加わって、ネジを探し始める。ついにネジが見つかると歓声が沸き、無事にねじを取り付けるとハイタッチ。そして、一人一人何事もなかったように日常に帰っていく。日本が誇るおもてなしや優しさは決して外国に劣るとは思えない。しかし、これほどまでに気軽に自然に手助けできるとも思えない。

世の中の障害（バリア）は人の手によって超えられる（フリーになる）。これは世界一周を経験して得た筆者の認識であり、私もそう思う。

それならば、世界から認められている優しさや礼儀正しさを兼ね備えている日本人に、そのバリアフリーの心が備わればより最強になるのではないか。

世界から見た日本を少し考える機会となった。

光文社　千五百円

■外山滋比古　著

ことわざの論理

牛尾小（姶伊）仮屋浩一

昔、共通一次試験を終えた私は、二次試験に向けた準備をしていた。二次試験は小論文である。論文など書いた経験がない私にとって、高いハードルであったことは間違いない。私は図書館で何か役に立つ本はないかと探していた。論文とはまるで関係がないのに、つい手にしたのがこの本である。文体は簡易で読みやすく、しかも論がしっかりしてるので、すっと頭に入ってきた。文章にリズムもあり、つい引き込まれてしまう。この本は、諺を読み解きながら、人としての考え方や生き方を、著者なりの考察で記してある。当時、難解な現代国語で頭を悩ませることが多かった自分にとって、読み手に分かりやすく書く方法があるという驚きと、人に伝えるために文章を作ることは楽しいことだと気付かせてくれた本である。

今読み返してみると、教育的な内容にも触れられていることに気付く。例えば「釣った魚に餌やるばか」の諺を下敷きに次の一節がある。

「テストで三十点しかとれない子がいる。満点マイナス七十点と思うからほめられない。でも0点よりは三十点ましだと考える。ただ三十点を褒めろというわけではない。褒めてやろうという心で三十点を見ろということだ。次のテストでは四十五点とったとする。満点主義ならとても褒められた点ではない。でも0点主義なら五十％の大躍進だ。八十点の子にはできない芸当だ。中略～こうやって褒められていると、そのうちだんだんとできるようになるから不思議だ。ほめるということはそれくらい価値がある。」

多面的に子供を捉えるという点では、様々な価値観が出てきたこの時代にも相通じるところがあると思えないだろうか。

この本の初版は、昭和五十四年であるが、今でも通用する内容であることを鑑みると、諺が長い歴史や経験の積み重ねで語り作られ、真理に近いものだけが残っていることをしみじみと感じる。また同時に、真理は一つではないという諺の懐の深さを感じることもできる一冊である。

ちくま学芸文庫　九百二十四円

■中島勝住・中島智子　編著

小さな地域と小さな学校

開聞小（南）若山深志

この本は、私が新任校長として赴任することが決まったときに、上席から紹介された本である。

日本では学級数によって、「過小規模校（小学校では五学級以下）」、「小規模校（小学校では六～十一学級）」、「適正規模校（小学校では十二～十八学級）」、「大規模校（小学校では十九～三十学級）」、「過大規模校（小学校では三十一学級以上）」に分類される。また、複数の学年を合わせた複式学級編成をとることによって、小学校で三学級以下の学校は「極小規模校」と呼ばれている。

令和五年度の文部科学省の学校基本調査によると、鹿児島県の公立学校の中で、十一学級以下の小学校の割合は、三十五・四％、五学級以下の小学校は三十七％と七十％以上の小学校が、適正規模以下の学校のようである。

本書では、中山間地域・離島といわれる過疎傾向が進んでいる地域で、最小のインフラである小・中学校に注目し、それぞれの多様性を前提とした上で、「学校（教育）」の維持を通して「地域」の継続を試みている事例について、その可能性と立ちはだかる障害や限界も包括的に取り上げ論じている。

第一章では、離島の取組として、屋久島の一湊地区と口永良部島が紹介されている。

第三章では、移住者を受け入れた先発地における地域と学校の事例が紹介されている。学校の存続だけでなく、将来、どのようなコミュニティを作り上げていくのか地域と学校が話し合い、協力し合うことの大切さが紹介されている。

本校は「小規模校」にあたる。また、令和八年度には、創立百五十周年を迎える歴史ある学校である。本校に縁あって赴任し、任せられた期間の中で、学校・保護者・地域等と知恵を出し合い、本校のよさを情報発信しながら、より多くの方々が集う「百五十年目の節目の年」を迎えられるよう取り組んでいきたい。

明石書店　二千七百円

■**栗山英樹　著**

信じ切る力

加治木中（姶伊）塩　津　一　弘

著者である栗山さんは、東京学芸大学野球部出身で、私の先輩にあたる方です。その大学野球部のレベルは、東京六大学はじめ他のリーグと比べると、さほど高いとは言えません。そのようなチームの出身で、プロ野球のコーチ経験もなく、監督になり、さらには侍ジャパンの監督として世界一まで達成されています。

その栗山さんが、これまで著書「伝える。」や「栗山ノート」等で、管理職として選手とどうかかわればよいか、組織づくりはどうすべきか、人としての生き方はどうあればよいか等について書いた後、今の思いを本書に書き記しています。

ところで、私自身高校野球の監督に憧れ、高校体育を受験したところ、初任校は鹿児島盲学校、その後も特別支援学校を経験し、教頭として中学校教育に携わり始め、現在があります。

栗山さんのように経験がなくとも、飛び込んだところを愛し、何をすべきか、何ができるか一生懸命考え、全力を尽くす。そんな生き方と自分を重ねながら、先輩に少しでも近づきたいという思いで、栗山さんのこれまでの著書や本書を読んできました。

本書「信じ切る力」においては、「人を信じて、心の底から信じ抜いて共に前に進むことは、どれだけ己の心の中に穏やかさ、嬉しさ、喜びをあたえてくれることか。どんな結果だとしても、その真実の思いは必ず相手に伝わっていきます。それは時間がかかることかもしれない。ただ、その本物の真心はいつか必ず力を与えます。」と書かれています。

先般全校朝会で、海援隊「贈る言葉」の映像を見せながら「これから始まる暮らしの中で、誰かがあなたを愛するでしょう。だけど私ほどあなたのことを深く愛したやつはいない。信じられぬと嘆くよりも、人を信じて傷ついたほうがいい。」という思いでいることを、全校生徒に伝えてもみました。

これからも、職員、生徒一人一人に寄り添い話を聞き、心の底から信じ切ることを大切に、全力で学校経営に邁進していきたいと思っています。そんな学校経営、教育の在り方に示唆を与えてくれる一冊です。

講談社　千六百円

星野富弘さんを偲んで

和泊中(大)税所篤哉

事故で手足の自由を失い、口にくわえた筆で創作活動をしていた詩画作家の星野富弘さんが、今年の四月二十八日、七十八歳で亡くなったとの訃報に接し、とても寂しく悲しい気持ちになりました。

これまでに星野さんの詩画集をよく眺めて、繰り返し読んできました。星野さんの絵には美しさとともに、人の心を包み込んでくれる温かさがあります。心が行き詰まった時には、事故で四肢が不自由になっても美しい絵を描き続けた星野さんの姿を思い出して、自分が今悩んでいることが小さな悩みに思えました。超えられない壁はないんだよ、と教えられてきたような気がします。

生徒に、集会や学級活動の際に紹介したことがある詩です。

『辛いという字がある
もう少しで　幸せになれ
そうな字である』

悩みや不安を抱えている生徒には、「あとちょっとだけ頑張ろうね。今、踏んばろう」「きついことは、ずっとは続かないんだよ」「明けない夜はないよ。やまない雨はないんだよ。」「今は少し休んでもいいんだよ。」などと励ましたことを思い出します。

ついつい他人と比べてしまう自分がいます。思春期の中学生は人と自分とを比べ、落ち込むことがよくあります。そして、必要以上にネガティブになってしまいます。「今のままでいいんだよ、人と比べなくていいよ」と、よく話をしました。

『川の向こうの紅葉が　きれいだったので
橋を渡って行ってみた
ふり返ると　さっきまでいた所の方が　きれいだった』

友人関係のトラブルを抱えた生徒には、次の詩を紹介したこともありました。

『鏡に映る　顔を見ながら思った　もう　悪口をいうのは　やめよう
私の口から出た言葉を　いちばん近くで聞くのは　私の耳なのだから』

生徒に話をする時だけではなく、自分自身も、人生の節目節目でたくさんの生きる力をもらいました。心折れそうな時に、勇気をもらってきました。

『よろこびが集まったよりも　悲しみが集まったほうが
しあわせに近いような気がする
強いものが集まったよりも　弱いものが集まったほうが
真実に近いような気がする
しあわせが集まったよりも　ふしあわせが集まったほうが
愛に近いような気がする』

『痛みを感じるのは生きているから　悩みがあるのは生きているから
傷つくのは生きているから　私は今　かなり生きているぞ』

教頭をしていた時には、心身ともにきついことが多かったと思います。そんな時期にも、星野さんの詩や花の絵に励まされました。

『冬があり夏があり　昼と夜があり　晴れた日と雨の日があって
ひとつの花が咲くように　悲しみも苦しみもあって　私が私になってゆく』

『暗く長い　土の中の時代があった　いのちがけで　芽生えた時もあった　しかし草はそういった昔をひとことも語らず
もっとも美しい　今だけを見せている』

「今日も、無事に終わった、よかった。生徒も先生方も、みんな元気に帰宅していった。今日もありがとうございました。」という感謝の気持ちで、これらの詩を何度も読み返していました。

これからも、星野富弘さんの詩を、季節の折々に、または、心の動きのままに、読み続けていきたいと思います。

『雨を信じ　風を信じ　暑さを信じ　寒さを信じ　楽しみを信じ
苦しみを信じ　明日を信じる　信じれば　雨は恵み　風は歌
信じれば　冬の枝にも　花ひらく』

たくさんの幸せな言葉・励ましをくれた星野富弘さんに感謝しています。ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

（※ゴシック体の部分は星野富弘さんの詩画集からの引用）

郷土の紹介

ふるさとに来たりて思うこと

加世田中（南）藤　野　義　久

「ふるさとは遠くにありて思うもの」と室生犀星は詠んだ。この詩は望郷の念ではなく、故郷で感じた違和感や疎外感を詠ったものであるという。私は南さつま市に生まれたが、六歳で鹿児島市に移ったことから、何となく鹿児島市がふるさとだと思っていた。しかし、五十数年後に南さつま市に勤務することとなり、少々遠い場所だった生まれ故郷を今は強く意識している。目下この地での職責をどう果たすかが大きな課題である。

〈南さつま市の概要〉

［自然］薩摩半島南西部に位置し、東シナ海に面した本市は、日本三大砂丘の一つ吹上浜や旧笠沙町から旧坊津町にかけての美しいリアス式海岸のほか、金峰山や野間岳などの山岳、万之瀬川などがあり、美しい自然に恵まれている。特産品には、早場米で知られる金峰コシヒカリやカボチャ・ラッキョウ・キンカンなどがあり、七つある焼酎蔵では多様な焼酎がつくられている。

［学校］七つの小学校、三つの中学校、二つの義務教育学校、一つの特別支援学校、二つの県立高等学校、一つの私立高等学校などを擁する文教の地である。

［文化財］国指定有形（涅槃図）史跡（椨ノ原遺跡、阿多貝塚）名勝（坊津）天然記念物（ハマボウ群落ほか）や国選定重要伝統的建造物群保存地区（加世田武家屋敷群）をはじめとし、県指定の有形（阿弥陀如来像ほか）、有形民俗（水車カラクリほか）、無形民俗（津貫豊祭太鼓踊ほか）、史跡（一乗院跡ほか）、登録有形（丁子屋石蔵ほか）など多くの文化財がある。

［教育］薩摩藩中興の祖と言われる島津忠良の「日新公いろは歌」の教えを大切にしながらも、義務教育学校の設置や、コミュニティ・スクール、時代に対応した制服の制定、始業式と入学式の別日実施などの新しい取組に果敢に挑戦している。「進取」の精神が息づいている。

〈進取の精神〉

本校は学校名に「加世田」を冠している。そもそも加世田とは古事記・日本書紀にある「吾田の長屋の笠沙」「笠沙田」が「かせだ」に転化したものと伝えられている。

本校は、一九五二年には青少年赤十字（JRC）に加盟し、その「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」という実践目標と、「気づき」「考え」「実行する」という態度目標を実現すべく、いち早く教育に取り込んだ。加えて本市の企業、本坊酒造の動きを紹介したい。明治五年に綿加工・菜種油製造業を創業し、澱粉事業、焼酎の醸造と事業を拡大した。一九四九年にはウイスキーの製造免許を取得し、山梨などでウイスキー造りを行ってきた。そして、二〇一三年にワールド・ウイスキー・アワードで世界最高賞を受賞するといった快挙を成し遂げ、その後も世界の数々の競技会で金賞を受賞している。二〇一六年には本市にマルス津貫蒸留所を新設し、二〇二四年には東京ウイスキー&スピリッツコンペティションにてジャパニーズジン部門「ベスト・オブ・ベスト」を受賞している。このように日本人がウイスキー造りで世界のトップに立てたのはなぜか。その躍進の原動力は「進取の精神」はもとより「協力一致の精神」「不屈の精神」があったからであると津貫蒸留所の説明パネルは物語る。

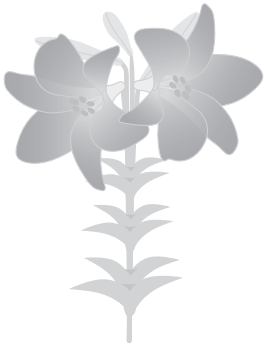
生徒にとっても私にとっても大切なふるさとであるこの地で、「新たな価値の創造に挑戦する」意志と勇気をもった生徒の育成に努めていきたいと思う。

あなたの欠点も好んでくれる人を友にしたい。

自分を褒めてくれる人より
叱ってくれる厳しいことを
言ってくれる人を慈しむ。

嘉例川駅　©K.P.V.B

提供「僕の贈りもの　日めくりカレンダー」
松山　武史　氏



一般財県校長会館だより

本年度も、県校長会館主催の教育講演会を左記のとおり開催する予定です。詳細につきましては、改めて御連絡いたします。

○日時　令和六年十二月八日(日)十四時～
○会場　県医師会館大ホール４F
○講師　室原　誉伶　氏
（ドクターコトーで有名な下甑手打診療所所長）

教育長異動

○新任　令和六年八月十三日付
中種子町　鮫島　孝則氏
（前中種町立岩岡小校長）

季節の言葉「夏の雲（夏雲）」

夏の雲　朝からだるう　見えにけり　小林一茶

連峰の　高嶺々々に　夏の雲　高浜虚子

夏雲の　湧きてさだまる　心あり　中村汀女

編集後記

早いもので間もなく二学期が始まります。学校行事も多く、児童・生徒たちが学習面はもちろんのこと、精神面でも大きく成長する時がきます。コロナ禍で三年間行動制限がかかっていましたが、昨年度から徐々に以前と同じように行事の実施や部活動等ができるようになりました。やはり人間はお互いに手を取り合って、面と向かってコミュニケーションをとり、つながっていくことが成長の原点だと感じています。これからの二学期、児童・生徒たちの成長を支えていけたらいいなと思っています。

さて、この七月から新紙幣が発行されました。その中の新一万円札の肖像として選ばれたのは、日本の「近代資本主義の父」と称される渋沢栄一氏です。彼の講演をまとめた『論語と算盤』は今でも経営者はもちろんのこと、多くの人の座右の書として読み継がれている名著といえます。

『論語と算盤』では孔子の教え（『論語』）と商売の融合こそが大切であり、利益のみを追求する商売は永続しないと述べています。この教えを教育の場面に置き換えると、「それぞれの発達段階に応じて道徳心をしっかり身につけさせつつ、学力の伸長を図ることが大切であり、そのことが未来を生きる児童・生徒の幸せや日本や世界の発展につながる」と私は解釈しています。我々の仕事は崇高な理想のもとにあることを再度認識したいものです。

最後になりましたが、校務ご多用の中、玉稿をお寄せいただきました先生方に厚くお礼申し上げます。今後とも連合校長協会広報部の業務にご協力をよろしくお願いいたします。

上ノ町　久（鹿児島女子高校）